

Title	『智恵鑑』の出版と修訂
Sub Title	On the publication and the first revision of Chie-kagami
Author	柳沢, 昌紀(Yanagisawa, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.145- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『智恵鑑』の出版と修訂

柳沢 昌紀

はじめに

『智恵鑑』は、橋軒散人辻原元甫作の仮名草子である。十巻十冊で万治三年（一六六〇）の自跋を持つこの作品は、明の馮夢竜の『智囊』もしくはその増補版『智囊補』等を典拠とし、智恵の鑑とすべき説話を和解したものであることが、諸先学により明らかになっている。⁽¹⁾ また、本作品の翻刻を収める『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇』一⁽²⁾の解題で、中村幸彦・木村三四吾両氏は、次のように述べている。

本書は刊行以来、単に教訓としてのみならず、興味ある読物として、弘く読まれ、西鶴近松の旧くから馬琴等にとる迄近世文学の趣向で本書の影響下にあるものが多い。

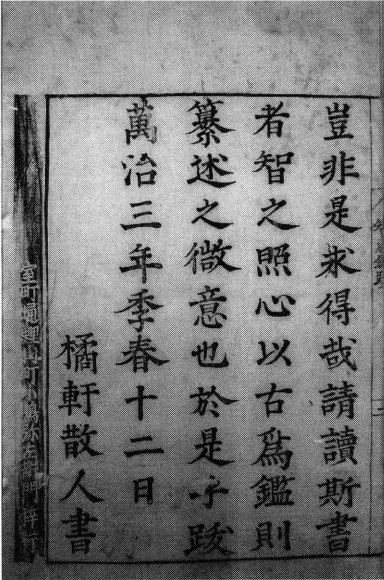
両氏の指摘どおり、本作については、その後の研究により、浮世草子以下の小説類などとの類話影響関係が数多く指摘されている。⁽³⁾

本稿では、この『智恵鑑』の出版に際して、作者である元甫自身により行われた本文修訂の様相を具体的に検討し、その意味するところを明らかにする。さらに、作者元甫と版元小嶋弥左衛門との関係についても言及したい。

一 東大本と架蔵甲本

まずは、図1をご覧いただきたい。これは、架蔵乙本の巻末である。前述の『近世文学未刊本叢書・仮名草子篇』一の翻刻は、架蔵乙本と同様の刊記を持つ天理本を底本とするが、⁽⁴⁾同書解題には、以下のような記述がある。

初版は室町通鯉山町小嶋弥左衛門梓行と跋の末欄外に陰刻してあり。再版は同じ場所に二条通玉屋町上村次郎衛門刊行と陽刻してある。



豈非是求得哉請讀斯書
者智之照心以古爲鑑則
纂述之微意也於是乎跋
萬治三年季春十二日
橋軒散人書

図1 『智恵鑑』架蔵乙本 巻末

ところが、勝又基氏は、小嶋弥左衛門の刊記を持つ本に二種類あることを明らかにし、巻五目録の第一三章の章題が欠落した状態の天理大学附属天理図書館本を「小嶋早印本」、それを入木で補い、さらに本文の数箇所を改めた玉川大学本、京都大学頼原文庫本等を「小嶋修訂本」と位置づけた。⁽⁵⁾さらに、東京大学総合図書館蔵の一

本は無刊記ながら「小嶋早印本」たる天理本に先んじており、東大本に百箇所以上もの修訂を加えたのが天理本であることを述べた。すなわち、勝又氏の明らかにした『智恵鑑』の初期の諸本関係は、左の如くである。

- 1、無刊記本（東大本）…卷五目録一二まで
- 2、小嶋早印本（天理本）…卷五目録一二まで
- 3、小嶋修訂本（京大本他）…卷五目録一三まで
- 4、上村次郎衛門求版本…卷五目録一三まで

これを踏まえた上でご紹介したいのは、架蔵甲本である。その略解題を、東大本と併せて次に示しておく。

東京大学総合図書館蔵「E二四／一三九二」

十卷。大本十冊（鞘表紙により合三冊）。

表紙 後補縹色表紙。二六・〇×一七・〇糎。

題簽 左肩後補双辺題簽に「智恵鑑 壹（一十）」と墨書。

序 卷一卷頭二丁。

目録 卷一・二・八・九は二丁ずつ、卷三・四・五・六・七・十は一丁ずつ。

目録題 「智恵鑑」卷第一（一十）／上智（明智、察智、膽智、術智、捷智、語智、兵智、閨智、雑智）目録（卷十のみ「目録」）。

内題 「智恵鑑」卷第一（一十）／上智部（明智部、察智部、膽智部、術智部、捷智部、語智部、兵智部、閨智部、

雑智部ざつちのぶ（巻一・三・四・七・八は「智惠鑑」に読仮名なし）。

柱 白口単白魚尾、中縫に「智惠鑑一（〜十）」、下象鼻に丁付（巻七の第三四丁「卅四至六」、以下「卅七（〜四

十五）」。

匡郭 四周単辺。二〇・七×一四・六五糎（巻一本文初丁表）。

本文 每半葉一〇行、行二三字内外、句読点・読仮名付刻。巻七の第三四丁裏は一〇行目下部の料紙が切り取られ、「てかく米こめの価あたげ直ちきなるは」と刷られた別紙を裏から貼付。

挿絵 あり。

丁数 巻一―五四丁（含序二丁）、巻二―四八丁、巻三―二二丁、巻四―一五丁、巻五―一九丁、巻六―一八丁、巻七―四三丁、巻八―四四丁、巻九―三三丁、巻十―三三丁（含跋二丁）。

尾題 「智惠鑑巻第一（〜十）終」。

跋 巻十卷末二丁、末尾に「萬治三年季春十二日／橘軒散人書」。

刊記 なし。

印記 「青洲文庫」「東京帝／国大学／図書印」。

識語 「雲樵堂藏」「雲樵山旧藏」「雲樵堂記」。

柳沢藏（甲本）

十卷（欠卷二）。大本九冊。

表紙 濃縹色地紙に蓮華唐草卅つなき文様空押。二七・五×一七・七糎。

題簽 左肩双辺題簽。但し、卷二・三・八は殆ど剥落、ほかの巻も斑に剥落。

序 卷一欠のためなし。

目録・目録題・内題・匡郭・本文・挿絵・丁数・尾題 いずれも卷一部分を除き東大本に同。

跋 東大本に同。

柱 東大本に同なるも、卷七の第三四丁は「卅四」（その下に「至六」と墨書）。

奥付 卷十後表紙見返し右下、双辺枠中に「室町通鯉山町／小嶋弥左衛門之^開」。

識語 「樋口美稚」。

架蔵甲本は残念ながら卷一の一冊を欠くが、卷二以降の本文は東大本と完全に一致する。唯一異なるのは、卷七第三四丁の丁付部分である。東大本、架蔵甲本とも、卷七の丁付には飛び丁が見られ、これは天理本以下では入木訂正されるのだが、「卅四至六」の「至六」が、東大本は印刷もしくは押捺であるのに対して、架蔵甲本は墨書なのである。東大本のそれが入木なら、架蔵甲本が東大本に先行することになるが、その点は判然としない。

また、東大本は無刊記であるが、架蔵甲本には、図2のごとく小嶋弥左衛門の名が後表紙見返しに記されている。図1の天理本の小嶋刊記と何故形式が異なるのかわからないが、どうやら『智恵鑑』の版木は最初の段階から小嶋弥左衛門方で彫刻されたものと思われるのである。東大本が無刊記なのは、全冊後補表紙故、改装時にもともの後表紙見返し紙が失われてしまったためであろう。すなわち、『智恵鑑』の刊行書肆は小嶋弥左衛門であり、小嶋蔵版時に、本文

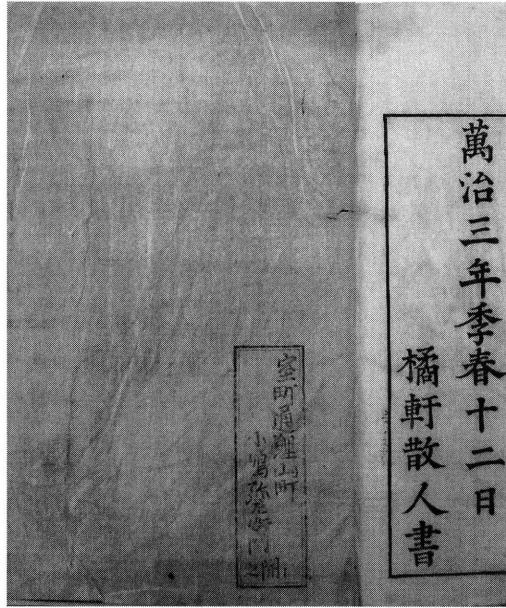


図2 『智恵鑑』架蔵甲本 巻末

内容にも関わる大幅な第一次修訂と、目録や本文の体裁などを整える小規模な第二次修訂が加えられ、その後上村次郎衛門に求版されたものようである。

ところで、東大本や架蔵甲本は、校正刷を製本した、いわゆる校正本ではないようである。仮名草子や浮世草子の校正本については、岡雅彦氏が寛文二年（一六六二）刊行の『案内者』赤木文庫本を、川元ひとみ氏が『風流今平家』平井隆太郎氏蔵本を、それぞれ紹介している⁷⁾。また筆者も、小説類ではないが、寛文十一年刊『本朝書籍目録』の中京大学図書館蔵本が校正本であることを指摘したことがある⁸⁾。これら校正本には、いずれも朱による校正が施されている。が、『智恵鑑』

東大本や架蔵甲本には朱による校正は認められない。そして、朱の施されていない、修訂前の本が複数存在するということは、第一次修訂が一度出版された後に行われたものであったことを示す証拠と考えると良いのではなからうか。

そうすると、『智恵鑑』における、この大幅な第一次修訂は、誰の意向により施されたのか、ということが問題となってくる。結論から言えば、それは作者辻原元甫の意向と考えてはほ宜しいのではないかと思う。以下、修訂の様相を具体的にしながら、そのことを検証してゆくことにする。

二 修訂の種類

第一次修訂による本文異同は、前述の勝又氏稿に一覧表が掲載されているので省略し、その主なものを、修訂の種類により分類して示し、検討してゆきたい。修訂の種類は、A本文内容の追加変更、B内容に関わる語の加除変更、C句と句を接続する語や助詞・助動詞の加除変更、D文の分割、E誤字脱字訂正、F仮名遣いの変更、G読点の加除変更、H読仮名の追加変更、と多岐に亘っている。以下、E、H以外の例を、具体的に挙げてゆく。

A本文内容の追加変更は、第一次修訂による本文異同のうちで、最も重要なものと言えよう。勝又氏も、これらについては既に、異同の意味を検討している。ただ、本文内容の追加変更は、作者以外の人物、例えば版元関係者が行ったということも考えられなくはない。そこで今回まず注目したいのは、A以外の細かい異同である。

全体で百箇所を超える修訂のうち、二十一箇所を占めるのがF仮名遣いの変更である。表1にその全てを示した。

表1 F仮名遣いの変更

卷・章	丁・行	東大本（架蔵甲本）	天理本	歴史的仮名遣い
一の一	四裏三	もとい	☆もとひ	もとゐ
一の七	一三表四	くらいて	○くらひて	くらひて
一の二一	一九表八	もちい給ふ	○もちひ給ふ	もちゐ（ひ）給ふ
一の二一	三九表二	いきどをる心	○いきどほる心	いきどほる心
一の二七	四七表七	○天下長久のもとゐを	☆天下長久のもとひを	天下長久のもとゐを

○歴史的仮名遣いと一致

☆同語を統一表記

二の九	一六表四	○とみさかえ	とみさかへ	とみさかえ
同右	一六裏二	○ふがひなく	ふがひなく	ふがひなく
二の二七	四六裏六	○かひに行事	かひに行事	かひに行事
六の一五	一八表七	あいしらい	○あいしらい	あいしらい
七の三	六表九	えいつぶれ	○えいつぶれ	えいつぶれ
七の八	一二裏五	てうあひ	○てうあい	てうあい
七の一三	二〇裏四	うばひあいて	○うばひあひて	うばひあひて
七の一六	二六表七	御てうあひ	○御てうあい	御てうあい
八の三	七裏一	つかひ用ひて	○つかひ用ひて	つかひ用ひて
同右	七裏六	きおひかゝりたるもの	○きほひかゝりたるもの	きほひかゝりたるもの
八の九	一三裏七	きおひ懸て	○きほひ懸て	きほひ懸て
八の二四	三〇裏三	つがいよき所にて	○つがひよき所にて	つがひよき所にて
八の二七	三三裏七	えらみ	○えらひ	えらひ
八の三一	三九裏六	すくい ^の 加勢	○すくひ ^の 加勢	すくひ ^の 加勢
九の一三	一八表九	おつとのしがひ	○おつとのしがい	おつとのしがい
九の二三	三〇表一〇	かひなき人	○かひなき人	かひなき人

これらは全て一字のみを入木で変更しているのだが、歴史的仮名遣いに照らし合わせてみると、二十一例のうち十六例は誤りを正す結果となっている。また、歴史的仮名遣いとは一致しなくても、天理本の欄に星印を付した二例は、同じ「もと」という言葉を「もとひ」と統一表記に変更している。当時は、行阿撰『仮名文字遣』などが刊行され、流布していたから、仮名遣いを意識的に正すことが行われても不思議ではない。しかしながら、一度版木の彫刻が終わった段階で仮名遣いを一々正すようなことを、作者以外の人物がしようとするであろうか。それは考えにくいように思うのである。

C句と句を接続する語や助詞・助動詞の加除変更、D文の分割、およびG読点の加除変更についても同様である。これらは、文章内容とはあまり関係なく、文章推敲の意識から行われた修訂と位置づけることができる。

C句と句を接続する語や助詞・助動詞の加除変更の例として、巻八の一七「唐の張巡敵の大将を見しる事」の全文を掲げてみよう。

唐の安慶緒が大将尹子奇。十余万の勢にて。張巡か持かためし睢陽の城をせめける時。張巡かたく守りてくだらす。一日に廿度はかりの合戦に勝負いまだ見えざりければ。いかにもして大将尹子奇を射おとさんと思へ共。見しりたる人なかりし所に。張巡はかりことを以て。ひそかに蒿の矢をつくり射たる所に。案のことく此矢にあたりたる者不審をたて。矢だねつきたるゆへならんと思ひ。此趣大将にしらせまいらせんと思ひ。へとて(天理本)いそぎ彼よもぎの矢を持。はしり行て大将尹子奇に告げる故張巡その体を見て。扱はつげにゆきし人こそ大将ならんともひ。南霁雲といふ弓の上手をめしねらはせけるに。あやまたず尹子奇がひだりのまなこを射通しければ。其ま、

惣くつれに敗軍しけるとぞ

(東大本・架蔵甲本)

傍線を付したごとく、東大本・架蔵甲本では一文中に「と思ひ」という表現が三回あつたのであるが、繰り返しを嫌つて一箇所を「とて」に変更したものとと思われる。

次に、D文の分割の例として、卷二の二「漢の高祖韓信を齊王に封ぜらるゝ事」の前半部を示す。

韓信かんしん齊の国を打ほろほし使者をたて、漢の高祖かうそに申上げるは。齊の国を手において侍れ共。齊の民の風俗ふうぞくのうら返すことくにて。いつはりのみおほければ。それかしをしはしがうちかりの王となし給は。国もしつまり思ひつき侍らんかと申上げる所に。高祖その状をひらき見給ひておほきにいかり。のり給ひけるは。只今われ項羽かううにかこまれ難儀なんぎしごくにおよへる所に。いそぎ取て返しわがたすけ共ならんとは思はずして。かへつて齊の国に逗留とちうりうして王号わうがうなどをのぞむ事沙汰のかざりと腹立はくりやうし給ひける時へ↓腹立し給へり其時(天理本)。張良陳平ちやうぢやうちへいひそかに高祖の御足をふみ気をつけて。御耳みみのそはへよりさゝやきけるは。韓信は智謀ちぼう勇力ゆうりきすぐれたる良将りやうしやうにて。齊の大國をたやすく打ほろほし。その功。莫太ばくたいなる所に。只今かりの王号わうがうをのぞみ。國をしづめんと申すを制し給は。恨うらみをふくみ変へんをなさんもはかりがたし所詮しよせんた、のぞみをかなへ給はんにはしかしと申上ければ。高祖もとより名將の御事なりければ。いひ出すと其ま、合点がくてんし給ひて。はじめいかりのり給ふ御詞ごことばをそだて、又いかりのりて仰けるは。大将たるもの、勲功くんこうをつくし。大國をせめしたがへたらんには。まことの王わうにならんとこそそのぞむへきに。かりの王号わうがうをのぞむは小氣せうきならずやとぞいひなをし給ひける。

(東大本・架蔵甲本)

これは、韓信が斉の国を滅ぼした後、自分を仮の王にしてほしいという書状を遣わしたところ、漢の高祖が腹を立てた。それを張良と陳平が諫めた結果、高祖は、大将たる者は誠の王を望むべきだと述べた、という話であるが、東大・架蔵本ではこの内容が全て一文で記されている。それはあまりにも長すぎて読みづらいという判断に基づき、改訂したものと思われる。

次に、G 読点の加除変更の例として、巻五の八「呉王妻の弟をうつ事」の冒頭部分を引こう。

呉王楊行密の北の方の弟朱延寿。軍功にほこり。おごりほしゑまゝなるふるまひをし。謀反をたくみければ。

(東大本・架蔵甲本)

呉王楊行密の北の方の弟。朱延寿軍功にほこりおごり。恣なる振舞をし。謀反をたくみければ。

(天理本)

この箇所は、巻五の七の話末の内容を増補するために改版された丁で、入木修訂ではない。しかしながら、修訂後の本文は修訂前より、文意の切れ目が定かになつてゐることがわかる。

以上の類の修訂は、その殆どが、元のままでも本文内容は伝わるにも関わらず、文章推敲の意識からなされてゐるようである。作者が、読みやすく、より良い本文を読者に提供しようという心がけた結果と捉えられるのである。東大本・架蔵甲本から天理本への第一次修訂は、作者辻原元甫の意向を汲んで行われたものと考えて良いのではなからうか。

三 本文内容に関わる修訂

さて、第一次修訂のうち、重要なのはやはりA本文内容の追加変更とB内容に関わる語の加除変更であろう。これらについては、一つ一つ詳細に検討すべきであるが、紙幅の関係で、今回は修訂内容の傾向を大まかに示すに止めたい。まずA本文内容の追加変更であるが、該当する章は五章である。勝又氏は、これらを三種類に分類している。すなわち、へ一〇類話の増補、へ二〇評語の増補、へ三〇評語の変更である。このうち、へ一〇類話の増補が行われているのは巻五の七と巻六の五である。

巻五の七「越王勾踐酒を川へなかし給ふ事」

されば人の心を一同しておもひつくを一味といふ事もこれよりおこり侍る也。穆生がアマ酒をまふけざりしより楚の国をさり。華元が御ひつじのあつ物およばざるをうらみて鄭のいくさにかけていり。華元をいけどらせし類大將たる人のわきまへ心がくへき事にあらずや人のおもひつくも。又はうらみをふくむ事も。いさ、かなる事よりおこりて。或は忠勤をぬきんで。或は仇かたきともなる事也

(東大本・架蔵甲本)

；是よりおこり侍る也。穆生がアマ酒をまふけざりしより。楚の国を去。子公か亀のあつ物あづからざりしを憤て。鄭の靈公を弑し奉り。羊斟か羊のあつ物及ばざるを恨て。鄭の軍に懸入華元をいけどらせし類。大將たる人の弁へ心がくへき事にあらずや。人の思ひつくも。又は恨をふくむ事も。聊なる事よりおこりて。或は忠勤を拙て。或は仇かたきともなる事也。爰を以て毛詩の語にも民の徳を失ふ乾餱以て愆つとあるをや

(天理本)

卷六の五「晋の宗典東安王を打奉る事」

晋の元帝の叔父東安王。成都王穎と合戦して。つゝに打まけ。河陽といふ所へおちられる時。舟場の奉行おしとめ自由に通さゞりけるに。あとより宗典といふ臣下おいつき。此よしを見奉り。そのまゝ馬のむちを以てした、かに東安王を打奉りて申けるは。今程乱世の砌にて。方々の関所。貴人の落人御せんさくの折から。汝等がこときいやしきもの迄もうろたへまはり。御隙をとらせまいらする歟。さても人がましやとて。からくと打笑ひければ奉行の人。まことの下部ぞと心得。そのまゝゆるして通しけり。又王廠か敗軍せし時。曇永といふ沙門。王廠が子のいまだ十二三ばかりなるをたすけかくさんとて。衣類などかづかせ。ともにつれおちけるに。これも関々にてとかわる人有しに。曇永かの子にむかひ。などはやくはありかぬぞとて。さんかくに打擲しければ。これもまことの下人ぞと心得。とがめずしてなんなくとをりすましけり。かの弁慶があたかにて義経をうち奉りしも異域同情の捷智ならずや

(東大本・架蔵甲本)

：つゝに打負河陽と云所へ落られける時。舟場の奉行おしとめ自由に通さゞりけるに。跡より宗典と云臣下追付。此由を見奉り。其まゝ馬の鞭を以てした、かに東安王を打奉りて申けるは。今程乱世の砌にて方々の関所貴人の落人御穿鑿の折から。汝等こときいやしき者迄もうろたへまはり御隙をとらせまいらする歟さても人かましやとてからくと打笑ひければ奉行の人誠の下部ぞと心得其まゝゆるして通しけり。又王廠か敗軍せし時曇永と云沙門王廠が子のいまだ十二三斗なるをたすけかくさんとて衣類などかづかせ。供につれ落けるに。是も関々にてとがむる人有しに。曇永かの子に向ひ。などはやくはありかぬぞとて散々に打擲しければ。是も誠の下人ぞと心得とがめず

して難なく通りすましけり。其外宇文泰の敗軍せられける時。落馬して只一人おられけるを。都督李穆か見付参らせて其ま、杖にて背を打参らせけるも是に同しかの弁慶があたかにて義経を打奉りしも異域同情の捷智ならずや

(天理本)

いづれも傍線部が増補部分になる。この二章の例はいずれも一丁分の改版による修訂であるが、勝又氏は、これについて「こうした増補箇所が、版木を改めてまですべきものであるという必然性を今ひとつ明かにしえないが、故事の重要性・信頼性は、現在の我々の感覚より遥かに重かつた事をあらためて認識させられる」と評している。同類の故事を増補するというのは、古典の注釈書類などで博引旁証がもてはやされた当時の風潮を想起させる。しかし、巻六の五の例は、典拠の『智囊』もしくは『智囊補』にありながら削っていた宇文泰の話を、復活挿入したに過ぎない。

〈二〉評語の増補の例は省略して、〈三〉評語の変更について見ておこう。該当するのは、巻二の六「漢の丙吉牛の喘ぐを問る、事」である。

まことに百官百僚それくのつかさとれる役々ある物なるに国老ともそなはりたらん人の勸定奉行台所横目などの役を心がけてそろばんのせんさく味曾塩の吟味迄せられんはたつとき位にはそなはりながら。そのたつとき所をしられざるおろかななる心なる故。みづからは君の御ためと思はるべけれ共かへりて不忠となりゆき侍るべしへ↓
味曾塩の吟味を詮要とせらるへき事にあらず。よし聚斂の利勸を専として財宝あつまるといふとも財あつまれば民散ずる道理なればかへりて不忠となりゆき侍るべし(天理本)←されは漢の文帝の御時。左丞相陳平に一年中の金

銀米銭の出入を尋ね給ふに。さやうの事は治粟内史の官のものにとはせ給ふべし。家老たるもの、知事には侍らずと陳平が答へ奉りけるは。誠の宰相の器量と申つべし

(東大本・架蔵甲本)

傍線部がへへ内のように変更されているが、勝又氏は、「なぜかような改編に及んだかは即断しがたい」とする。修訂後の本文には、家老が「味噌塩の吟味迄」すると何故「不忠となりゆ」くのか、その理由が示されているようである。が、修訂前の本文でも、文意が通らないわけではない。このように、A本文内容の追加変更は、いずれも不可欠とは言いい難い改訂ばかりなのである。

次にB内容に関わる語の加除変更であるが、卷二の五「魏の田子方捨られたる老馬を飼事」の全文を掲げてみたい。

魏の田子方野中をとをられける時。老たる馬をすて置たるを見て。此馬は何方より来れる馬ぞと尋ねさせられけるに。これはさる大名の御馬なるか老つかれて用にたゝざるゆへかくすてられし也と申ければ。田子方きゝて申されけるは。此馬わかき時は。毎日追つかはれて力をつくし。只今追がらしとなり老たればとすてらるゝ事は仁者のすべき事にあらずあはれむべき事なりとて。やがてひかせ帰りに飼おかれけるに。此事を諸国の牢人へ天下の諸侍(天理本)聞及び田子方が心ざしをかんにいづれも奉公せん事を願ひけるとぞ是を以て思ひめぐらすに惣じて人の奉公し苦勞をするも。あるひはやみ煩ひ。又は老後。又は子孫のためなどを思ひて旧功をなし侍る物なるに用いたつ時ばかりせりつかひ給ひて。今は用にたゝず無益なるものなりなどいひて見すて給はんはたのしからぬ事なれば主君の器量にはあらざるべし

(東大本・架蔵甲本)

ここでは「諸国の牢人」が「天下の諸侍」と改められている。中国の魏の話に「諸国の牢人」は相応しくないと判断による修訂であろうが、どうしても改めねばならないほどの瑕瑾とは思われない。B内容に関わる語の加除変更には、明らかな誤りの訂正も一部認められるが、多くはこうした表現レベルの修正に止まっている。

こうして第一次修訂の内容を分析してみると、全体に致命的な欠陥の訂正というような性格は認められない。表現の推敲などが主であり、一部故事や評語の増補変更が行われている、といった感じである。それはむしろ、自著の完成度に対する作者の凄まじい執念の発露とでも位置づけることができるかもしれない。

四 版元小嶋弥左衛門と元甫

では、全巻の版木が彫り上がった段階での、これだけ多くの修訂は、なぜ可能だったのであろうか。

ほぼ同時代の仮名草子における修訂といえは、万治四年（寛文元年、一六六一）に中野小左衛門から刊行された『女郎花物語』の例が知られている。¹¹ 刊本『女郎花物語』の作者は、書籍目録類の記載から北村季吟とされている。季吟作という点、仮名草子ではないが、寛文元年中野小左衛門刊行の『土左日記抄』や万治三年の序を持つ『新続犬筑波集』にも、それぞれ修訂が行われていることが明らかに¹²なっている。

しかしながら、より興味深いのは、『季吟日記』寛文元年十月十一日条の記事である。¹³

十一日 由敬慈仙来て閑話、夜更ぬ。由敬云、此比於江戸ト祐土左日記の抄作りて春齋に序か、せたりし。板

行せんとて見せたりしに、所々もれたる事おほし。就中山崎の相應寺の事不知よしなりければ、さつゝいころ予かうみまつをみせたりしに、其なかにありし事をおほえていひやりつ。其外あまた所、其うみまつの中よりいひやりにけりと云々。ト祐は儒なり。いかてか哥書をしらん。道春か博學なりしも、野槌に哥書の事はおほくあやまりにけり。まして其以下をや。海松の中より書出て、したりかほに板行しつらん所々をみるたひにこそかたはらいたからめと、いとおかしかりき。子孫につたへて惣く秘すへき事を、心得ぬ人にみすへからず。由敬は野子休太郎物よみの師也。何のかくすへき事かとはおもへは、うみまつにかきらす源語秘訣をも見せにけり。かく人にかたりてかるくしくせられん事とは、ゆめおもひきこえさりけれども、ト祐は又かの人の師也ければ、其師のあやまりあらん事を板行せん折にあはせては、予か信をうしなはれんも又ことほりなきにしあらず。されは由敬にうらむることはりは予にあらで、たゝ予かかるくしく此人にゆるしたりしあやまりを千悔するもの也。必家に秘すへき事はみたりに見せ、語るへからず。其本やは鯉山之町小嶋弥左衛門なり。已に板行してのち、
うみまつの所々をもてあやまちをたゝす事によりて、七八十日延引せり。これ板をほりかへたるゆへにと也。

この記事は、季吟の『うみまつ』という『土左日記』の注釈書の説を人見ト幽が剽窃したことに憤慨する内容となっている。その末尾の傍線部によれば、ト幽の『土左日記』注釈書刊行に関わった本屋は小嶋弥左衛門で、開版後の本文訂正に七、八十日間の時間的猶予を与え、しかも「板をほりかへた」というのである。

ちなみに人見ト幽とは水戸藩に仕えた漢学者で、『土佐日記附註』という注釈書を刊行しており、それには「寛文元年八月吉日」の刊記がある。しかしながら同書に版元名の記載はなく、本文修訂が存在するという報告もなされていない

い。また、卜幽が季吟説を本当に剽窃したのかどうか、定かではないようである。とは言え、『季吟日記』の記事を信用するならば、版元は小嶋弥左衛門であったということになる。小嶋は、刊行後の作者による本文修訂に比較的寛容であったのかもしれない。さらに言えば、辻原元甫は、『智恵鑑』刊行の翌年、卜幽の『土佐日記附註』が刊行された寛文元年に、徳川四代将軍家綱の侍医をつとめた人見元徳の推挙により、伊勢亀山藩に出仕しているのであるが、この元徳は卜幽の弟なのである。

ここで辻原元甫と版元小嶋弥左衛門との関係を押さえるべく、元甫の事蹟を振り返ってみたい。元甫の事蹟については、渡辺憲司氏の「辻原元甫略譜」に詳しい¹⁴⁾。元甫は伊勢桑名藩主松平定綱に藩儒として近侍するも、慶安四年（一六五一）の定綱没後は藩を離れ、十年後の寛文元年に四十歳で伊勢亀山藩主石川憲之に仕えている。仮名草子の著作をものしたのは、この禄を離れていた十年間で、明暦二年（一六五六）に『女四書』、明暦四年（万治元年）に『見ぬ世の友』、翌万治二年（一六五九）に『倭小学』、そして亀山藩出仕の前年の万治三年に『智恵鑑』を、それぞれ刊行している。このうち『女四書』の早印本には、小嶋弥左衛門の名が江戸の中野左太郎、中野仁兵衛の名とともに記されている。この刊記には、三書肆部分の匡郭下辺に入木を示す切れ目があるが、初印と思われる架蔵本にも切れ目があり、刊行当初より入木であったものと思われる¹⁵⁾。また、元甫は『徒然草』明暦四年跋刊本の跋文を記している。図3に中京大学図書館蔵本の巻末部分を掲出した。年記の次行の「沙木居士」というのは、元甫その人である。『倭小学』の跋文に「辻原隠士沙木子謹誌」と記されているからである。そして『徒然草』明暦四年跋刊本の版元が、これも小嶋弥左衛門と江戸の佐野七左衛門なのである。

市古夏生氏は、二都版の早い例の最初に、この『徒然草』明暦四年跋刊本を挙げて¹⁶⁾いる。そしてその注で「『徒然草』

は未見なので、初板か後印本かは不明」としている。近時、国文学研究資料館の所蔵に帰した高乗勲文庫本の刊記は、中京大本より文字の輪郭が鮮明だが、入木とは思われず、初版（初印）と判断して良い。また、市古氏の二都版リストの二番目は『倭小学』で、これは江戸の黒河四良兵衛尉と京都の埜田弥兵衛の相版である。市古氏は、この二例について「いずれも仮名草子作者辻原元甫の関与したもの、何か作者と関連があるであろうか」と述べている。今、この疑問に答える材料を筆者は何も持たないが、刊記に入木の跡が見られる『女四書』も含めて、京都の本屋と江戸の本屋の相版の極めて早い例が、元甫の関わった書物に集中していることは事実と言えそうである。

それはともかくとして、辻原元甫は、『智恵鑑』出版時において、版元小嶋弥左衛門との間に、かなり親密な関係を築き上げていたのではないかと思われる。花田富二夫氏は、『女四書』『見ぬ世の友』『倭小学』の挿絵が承応二年（一

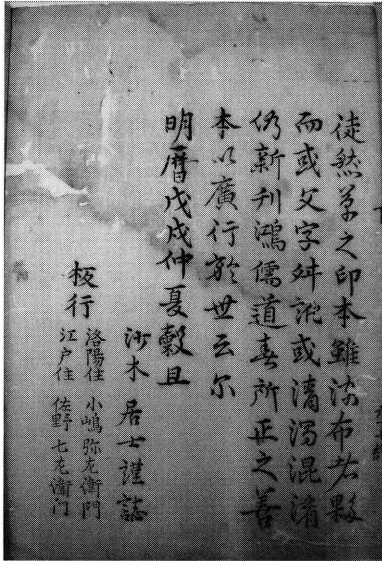


図3 『徒然草』中京大本 卷末

六五三) 刊和刻本『劉向列女伝』もしくは明暦元年跋刊で北村季吟著と目される『仮名列女伝』の挿絵を利用してのこと、そして『智恵鑑』の挿絵も「列女伝」および明暦四年刊『百戦奇法』の挿絵を利用したものであることを明らかにした⁽¹⁾。その上で、「小嶋弥左衛門は、承応二年刊訓点付和刻本『劉向列女伝』の版元でもあり、一連の挿絵製作の中心版元として何らかの要因を持ったことは疑い得ない」と述べている。また、『百戦奇法』の刊記には、「明暦四戊戌年仲夏吉旦 梓行 洛陽室町鯉山町 小嶋市郎右衛門」

とあり、同じ室町鯉山町である点よりして、これ又、小嶋弥左衛門関係書肆、もしくは一族と思われる」とも記している。¹⁸⁾ 花田氏の指摘は、首肯し得るものと言えよう。

おわりに

挿絵製作に版元周辺の過去の出版物が利用される一方で、本文には作者元甫の意向が細部にまで盛り込まれる、そんな万治期の仮名草子出版における版元と作者との関係が浮き彫りになってきた。そうして出版された『智恵鑑』は、作者辻原元甫の、正に渾身の著作であった。渡辺氏の「辻原元甫略譜」によれば、元甫と彼を伊勢亀山藩に推挙した人見元徳との関係は、松平定綱に仕えていた頃に遡ることだが、¹⁹⁾ 定綱没後も、人見家とは、書肆・小嶋弥左衛門周辺を結節点として、親交が続いていたのかもしれない。

近時、八木淳夫氏が報告した、元甫の伝記に関する新史料二点によれば、元甫は「物説役」として亀山藩に出仕したとのこと。²⁰⁾ 『智恵鑑』を初めとする著述の存在が、この出仕に繋がったであろうことは想像に難くない。自著の完成度を高めようという執念、それは新たな仕官という形で結実したのである。

注

(1) 目加田さくを氏「智恵鑑の典拠論——智囊との関聯よりみたる——」(『文芸と思想』九、昭二九・七)、花田富三夫氏「智恵鑑とその周辺」(『仮名草子研究——説話とその周辺——』平一五 新典社)等。

(2) 天理図書館司書研究部編、昭二二、養徳社。

- (3) 長谷川強氏『浮世草子の研究』(昭四四 桜楓社)、倉員正江氏「西鶴と其磧—浮世草子史の一側面」(『近世文芸研究と評論』二二、昭五七・六)、神谷勝弘氏『近世文学と和製類書』(平一一 若草書房)等。
- (4) 架蔵乙本は存卷六、十で、後述の小嶋修訂本にあたるが、刊記の形式は天理本と同様である。
- (5) 『智恵鑑』修訂考(『語文研究』八九、平一一・六)。
- (6) 架蔵甲本の奥付は「らんを通り印影が淡く、製本時あるいは製本後に、印刷もしくは押捺されたものかもしれない。また、天理本や架蔵乙本の刊記は入木である。匡郭外に陰刻で入木の小嶋刊記は、ほかに『聖賢像贊』(寛永二十年刊)の例がある。版木を彫刻したのは別の本屋という考え方もあり得ようが、可能性は低いと思われる。
- (7) 近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従・仮名草子編』九(昭四八 勉誠社) 解題、神谷勝弘・川元ひとみ・若木太一校訂『叢書江戸文庫・西沢一風集』(平一一 国書刊行会) 解題。
- (8) 中京大学図書館編『中京大学図書館蔵国書善本解題』(平七 新典社)の三三〜四頁。
- (9) 勝又氏の本文異同表には、若干の追加、訂正を行う必要があるが、紙幅の関係で省略する。
- (10) 『智囊』『智囊補』の諸版については、劉穎氏「『智囊』流布管見—書誌的事項を中心に—」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』九、平一六・三)に詳しい。元甫が使用した版がいずれであったかについては、未だ明らかになっていないが、今回は国立公文書館内閣文庫が所蔵する『智囊』(明代刊) 捷智部靈変卷十三に「宗典等」として、二点の『智囊補』(明末刊、見返し題を「増定智囊補」とするものは後印) 捷智部靈変卷十六に「宗典等三条」として、それぞれ原話が収載されていることを確認した。
- (11) 野村貴次氏『季吟本への道のり』(昭五八 新典社) 二〇二頁、朝倉治彦氏編『仮名草子集成』八(昭六一 東京堂出版) 解題参照。
- (12) 野村貴次氏『北村季吟の人と仕事』(昭五二 新典社) 二四〇〜二頁、近世文学書誌研究会編『近世文学資料類従・古俳諧編』一八(昭四九 勉誠社) 解題(雲英末雄氏執筆) 中「5諸本との比較検討」参照。
- (13) 天理図書館綿屋文庫編『俳書叢刊』二(昭六三復刻 臨川書店) 三〇〜一頁。句読点を私に補った。
- (14) 『近世大名文芸園研究』(平九 八木書店)。
- (15) 花田富二夫・中島次郎・柳沢編『仮名草子集成』四〇(平一八 東京堂出版) 解題ならびに口絵参照。

- (16) 「二都版・三都版の発生とその意味」(『近世初期文学と出版文化』平一〇 若草書房)。
- (17) 「挿絵の伝播―仮名草子漢画風挿絵考―」(『仮名草子研究―説話とその周辺―』平一五 新典社)。
- (18) 但し、『百戦奇法』の刊記の「梓行小嶋市郎右衛門」の部分は入木。
- (19) 注(14) 同書。
- (20) 「長岡元甫の伝記に関する新知見」(『近世初期文芸』二〇、平一五・一二)。

付記

本稿は、平成十六年十一月の日本近世文学会秋季大会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上御教示賜った方々に厚く御礼申し上げます。また、ご所蔵本を閲覧させていただいた文庫、図書館の方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。関場武先生には、学生時代懇切丁寧なご指導をいただき、さらに就職した後も度々励ましのお言葉をかけていただいた。心より感謝申し上げます。